

保育の交差点

交差点はどこにある



上 沢 謙 二

◇ 交差点とはどんなところか

交差点とは「ぶつかるところ」である。「ぶつちがいになるところ」である。ぶつかったり、ぶつちがいになったりするのはいうまでもなく、別なものだからである。別な方向から来たからである。つまり別な方向から来た別なものが、同じ時に、同じところで遇う。それが「交差点」なのである。

汽車電車の線路にそれがある。町の人道車道にそれがある。村の野路山路にそれがある。

単に交通路線ばかりではない。あらゆる世界に交差点がある。

保育の世界にも、それがあるのである。

◇ 清潔と不潔の交差点

「清潔」ということは、保育の一つの標語といってよい。保育の場も清潔、保育するものも清潔、保育されるものも清潔でなければならぬ。保育室は塵一つとどめない。先生はさっぱりとして、園児はきちんとしているところに、よりよき保育がおこなわれる。

けれども、保育という仕事はけっして「きれいごと」ではない。その一面は、汗の世界、泥の世界、ほこりの世界である。子どもたちはとび、走り、たわむれ、あそぶ。汗だらけ、泥だらけ、ほこりだらけである。時にはころんで血だらけにもなる。鼻の下に二本の白い太い線がぶらさがる。

しかしそれが幼児なのだ。幼児の生活はそうなければならぬのだ。もし、いつもきれいで、どこも清潔ばかりという幼稚園保育所があったとしたら、そこにはほんとうの子どもの生活はない

といわれるだろう。

そればかりではない。清潔なまっただ中に、突然、不潔が発生することもある。

ある子どもが嘔吐をする、おもらしをする。きれいなところは、途端にきたない場面にかわる。保育の一面にはこういう場面がある。そこに清潔と不潔の交差点があらわれるのである。

ある保育科の実習の時である。

いきなり、先生が呼んだ。

「ちょっと、みんな来て」

十人ほどの実習生がいそいで集まったそこには、何があつたか。床の上には黄色いどろどろ。異臭紛々。

先生はいった。

「よい機会です。たいせつなお稽古です。さあ、この始末をしてね。保育は心理学や教育学の勉強だけでは足りませんよ」

◇ やさしさときびしさの交差点

幼稚園保育所の先生はやさしくなければならない、たのしくなければならぬ、にこにこしていなければならない。「なければならぬ」ではない。おのずからそうなるのである。それで園児たちもおのずからやさしくなり、たのしくなり、にこにこになる

のである。

これは保育の原則とも、常道ともいふべきである。やさしく、たのしく、にこにこしているところに、よりよき保育がおこなわれる。

けれども、保育という仕事はけつしてゆつたりごとではない。時には制限もおこり、禁止もあらわれ、叱ることさえ出てくる。西も東もわからないで、思ったままの世界に生きている幼児を、正しく成長させ、誤りなく発達させようとするのだもの——そういう場合におつかるのは当然である。もし、いつも長閑で、何も問題がないという幼稚園保育所があつたとしたら、そこには完全な成長発達が望まれるか。疑わしいだろう。

頑ちゃんは自分勝手なはずらである。よくお友だちのものを取り上げて返さない。きょうもそれをやりだしたのである。

「頑ちゃん、クレヨンを千代ちゃんに返して」と、先生がそばへゆくと、逃げるようにあるきだした。

「きょうは徹底的に追及しよう。それはいたずらや強情は通らないという経験をさせるよい機会だ」

そう思った先生はあとについてあるきだした。頑ちゃんがかけだせばかけた。

園舎を二度まわって、とうとう外へ出た。

「もし家へ帰ったら、家までついてゆこう」と、先生は思った

が、また中へはいった。

そうして園舎の裏へくると、頑ちゃんはひょっこり立ちどまって、くるりとこつちをむいておじぎをした。

「先生、ごめんなさい」

そうしてクレヨンを三本つかんだ右手を出した。

これは実に一步も仮借しないぎりぎりのきびしさである。保育の一面にはこういう場面がある。そこにやさしさときびしさの交差点があらわれるのである。

団ちゃんはわがままで乱暴だった。きょうもみんなをなぐって押しとばして、ブランコを先き取りしようとしている。

先生ははっとしてそばへ寄ったが、いつものようにことばは出ないで、その代りにわれ知らず手が出た。そうして団ちゃんの手をつかんで、ぐっとひっぱった。団ちゃんはびっくりして、ひかれるままに、園舎の裏へ連れてこられた。

先生は手をはなして、団ちゃんとむきあつて立った。けれども何ともいわない。どうしたらいいのか胸いっぱいで、ことばが出ないのである。へんに思った団ちゃんがそとで見上げると、先生の顔とまともに会ったが、それはいつものやさしいにこ顔ではない、悲しい心配顔だった。団ちゃんはぎくっとして思わず目を伏せた。と、ぎゅっと両手をにぎられた。と、たったひとこと、洩れるようにことばが出てきた。

「団ちゃん、もうしないわね」

これは実に一寸のすきも入れないせっぱ詰まったきびしさである。保育の一面にはこういう場面がある。そこにやさしさときびしさの交差点があらわれるのである。

◇ しつかりとのんびりの交差点

保育のプログラムははつきりとしつかりと定められ、きちんきちんと運ばねばならない。だからこそ、一日の、一週の、一保育期の、さらには一年の予定も必要とされるのである。いわゆるカリキュラムの設定は、保育の基礎とも根柢ともいわれるべきもので、その形式が整い、その内容が詳しければ、よりよき保育がこなわれる。

けれども、保育という仕事はけっして「切り詰めごと」ではない。時には思いもよらないことがおこり、奇抜な珍妙な有様があらわれ、まちがい取りちがいさえ出てくる。

いったい保育というものは生活に即して営まれる。だから活きているからいろいろな場合がおこり、さまざま事件が生まれる。だから、時にはずれたりはみだしたりするのはやむを得ない——というより、むしろそうあるべきだろう。もし、毎日予定のままに進み、一年じゅう順序通りに運ぶ幼稚園保育所

があつたとしたら、それは固定した硬化した証拠だといわれよう。

園長先生がお誕生祝いの園児の名を呼ぶ時「大玉」といつてつかえたが、思いだして「三郎ちゃん」といった。

すると、園児たちはどつと笑いだした。

「三郎ちゃんじゃないよ、一郎ちゃんだよ」

と——園長先生もあはあど笑いだした。笑いながらいった。

「あつ、園長先生、まちがっちゃった」

そうして手を挙げると、自分で自分の頭を、軽くぽんとたたいた。

「わあつ」と、また新らしく笑声がおこる。

「一郎ちゃん、ごめんよ」

園長先生がいうと、一郎ちゃんも笑いだした。

まちがったものも、まちがえられたものも、まちがいを見つけたものも、おなじに笑って、おなじ気持になった。それでかえって一種の明かるい空気がその場にただよった。それでかえってたのしいお誕生祝いになったのである。

この時の気持は、ただおかしいというだけではない。おもしろいというだけでも足りない。「ふざけ」「おどけ」「じょうだん」。いよいよ当たらない。そこで考えられるのは「ユーモア」ということばである。然り、そののんびりした余裕のある点において、行きづまりをさらにと解きほぐす点において、新らしい興味を湧

きおこさせる点において、正にユーモアと呼ばれるのにふさわしい。そこにしっかりとこののんびりの交差点があらわれるのである。

◇ 交差点は難関で発展台である

もし、第一の交差点にぶつかって、顔をしかめたら、目をそむけたら、あとずさりしたら、それは清潔の保育だけにとどまって、まだ不潔の保育にまで達しない先生である。もし、第二の交差点にぶつかって、いいかげんに取り扱ったり、中途半端で済ましたりしたら、それはやさしい保育だけにとどまって、まだきびしい保育にまで至らない先生である。

もし、第三の交差点にぶつかって、顔色を変えて固くなったり、声を張りあげて笑を制止したり、いろいろな弁護やいいわけをいったりしたら、それはしつかりの保育だけにとどまって、まだのんびりの保育に進まない先生である。

保育者は、飽くまでも清潔に徹底すると共に、不潔に徹底しなければならぬ。飽くまでもやさしさに徹底すると共に、きびしさに徹底しなければならぬ。飽くまでもしつかりに徹底すると共に、のんびりに徹底しなければならぬ。

交差点こそは、保育における一種の難関ともいうべきであると共に、一種の発展台ともいわれるべきものである。